

# 現代中国における「民族」と 「エスニック・グループ」<sup>1)</sup>

Minzu and Ethnic-Groups in Modern China

麻 国 慶

MA Guoqing

中央民族大学民族学与社会学学院

*School of Ethnology and Sociology, Minzu University of China*

*E-mail: hssmgq@mail.sysu.edu.cn*

## Abstract

In the context of cultural relativism, the concept of minzu in Chinese implies diverse and uncertain connotations. In the post-nation-state era, the dualism between the real and virtual essence of minzu has collapsed, requiring scholars to adjust our conceptual systems about cultures, societies and states in responding to practical issues. In reviewing the ethnological and anthropological studies in mainland China in the 20th century, we see that the political process of Chinese nation-state building has specified the concept of nationality in a solid way, which was further challenged and deconstructed by a variety of theories on ethnic-groups in the second half of the 20th century generating a new dualism between the ontological and constructionist perspectives. Based on the theory of Pluralistic Unity of the Chinese Nation by Fei Xiaotong, this article proposes to go beyond such dualism so as to explore the internal logic of the Chinese Nation embedded in Chinese civilizations and histories and in the contemporary world.

## 1. はじめに

「民族」と「エスニック・グループ」の最も基本的な意味は人々の共同体を指し、異なる

1) 本稿は筆者の中国語版論文（鈴木貞美・劉建輝編：『東アジア近代における概念と知の再編成』、第293-306頁、国際日本文化研究センター、2010年3月25日）にもとづいて、翻訳・加筆されたものである。

るグループについての分類である。しかし、研究者がこの民族とエスニック・グループという言葉を経験と社会現実において考察すると、その意味合いは極めて豊富なものとなる。英語における「民族」は、人類が自己を認識する重要な概念として社会科学の諸分野に見られ、様々な意味合いが付けられている。特に「民族—国家 (nation-state)」、「民族主義 (nationalism)」などの概念は、歴史学、人類学、政治学、社会学、社会心理学、言語学、国際関係学、更には文学などの学科を繋ぎ、学科を越えた一つの広範な研究領域を形成した。西洋の学問が東洋に伝えられるに伴って、西欧の社会経験に基づき構築された「民族」の概念及び、関連の理論が中国にも伝えられた。それが中国の歴史や現実と衝突し、中国人の「民族」や関連の理論への理解、解釈、実践を複雑な社会思潮と歴史事実形成させた。それにより、中国語の学術界の「民族」に対する研究を把握することが一層難しくなった。

人類学研究において、「民族」または「エスニック・グループ」はある程度の明確な定義を持つ。それは同じ文化属性を有する人々の共同体 (ethnos) を指す。文化とは「民族」と「エスニック・グループ」を区分する際の基準である。人々の共同体は当然ながら人類学の研究対象であるが、共同体の本質及び関係に対する理解は徐々に深まってゆくプロセスであるといえる。古典人類学は非西欧社会全体を「他者」とし、「異文化」を研究するインターカルチャーの比較研究に熱心であったが、具体的なグループを研究対象にしていなかった。現代人類学の確立後、マリノフスキーの科学民族誌は具体的な民族グループを記述の対象としたものの、学術研究の問題意識は社会や文化的な運行メカニズムの探求にあり、「民族」本来の概念について検討する学者は少なかった。一九五〇年代の米国において「エスニック・グループ」(ethnic group) という概念が登場して、人類学は異なるグループの関係などの問題を研究テーマとして取り上げるようになり、人類学研究の新しい理論パラダイムが形成された。

社会科学の他の学科が「民族」についての定義で多様性を持つのに対し、人類学は文化と人間の共同の関係を強調し、一定の限界性を備える。しかし、中国大陸部の基本的社会制度、社会科学のマルクス主義の伝統と民族学・人類学発展の特殊な道りから、「民族」は中国大陸部において明確な存在の実体概念として、実践において、明確な研究対象となった。これに対して、後に中国の人類学学界に紹介された「エスニック・グループ」の概念及び関連の理論は、中国の複雑な社会背景の下で、学界に激しい論争を引き起こした。論争の一部は「エスニック・グループ」理論を越えた討論になり、中国の民族学、人類学の学術研究に対する反省、さらには国家の民族政策における「民族」の再認識にまで及んだ。「エスニック・グループ」は極めて大きな柔軟性を備えた概念となり、関連する学術成果は数多い。こうした研究の現状において、本文では中国の現代人類学、民族学の学界における「民族」や「エスニック・グループ」といった概念の討論には関与せずに、

中国大陸部の民族学、人類学における「民族」と「エスニック・グループ」についての研究実践を整理することで、中国大陸部の民族学、人類学発展の全体的な脈絡の中において、「民族」と「エスニック・グループ」に関する研究を把握することを目指す。

## 2. 「多民族の中国」の構築プロセスにおける中国の民族学、人類学の「民族」に対する理解

「国家」と「民族」は近代に海外から中国に入ってきた新しい言葉である。1902年、梁啓超はその『論中国學術思想變遷之大勢』で「中華民族」の概念を提起した<sup>2)</sup>。自覚的な民族実体としての中華民族は、中国と西欧列強の対抗の中で現れてきた概念であるが、自然に存在する実体としての民族は、数千年の歴史のプロセスの中において形成されたものである<sup>3)</sup>。「中」は本来、一部の中国人の自称であり、「華」に相對するのは周辺地域に生活する「夷」である。これは古代中国における、人々に対する基本的な分類である。儒教思想においては華と夷は區別されるが、それは必ずしも対立するわけではない。孔子は「教ありて、類なし」を強調した。華と夷は文化的に差異が存在するだけであり、もし「夷」が儒家思想に従うことができれば、自然に中華の一員になるのである。秦漢の後、王朝が何回も交代した。中国人の人類に対する分類の基本的な認識はそれほど変化していない。大まかに言うと、歴代の漢民族政權が強大な時には、しばしば文化の優劣を華夷を區別する基準した。これに対して、勢力が衰弱した時には血統の傳承を強調し、「夷に対する防衛を固める<sup>4)</sup>」としている。西欧列強が中国の大門を破り、西欧文化が大きな勢いを持って入ってきたことで、中国の伝統的な華夏中心主義は厳しい挑戰に立たされた。いち早く目覚めて世界を見た有識者は「今の夷狄は昔の夷狄ではない」と認識し始めることとなった。先ず器物から、政治、さらには思想の面にいたるまで西方に学び始め、救国を図った。19世紀末から20世紀の始めに直面した一連の失敗、特に甲午戦争における中国の惨敗、八か国連合軍の中国侵略などの事件は、中国人の思想を刺激した。西洋の東洋進出にともない、「民族」の概念は一連の社会や政治の思潮をともなって中国に入ってきたのである。現代の学術的な意義における民族の概念は、梁啓超が初めて提起した。1899年、梁啓超は『東籍月旦』の文章で初めて現代的意義の「民族」という言葉を使った<sup>5)</sup>。1901年には

2) 「梁啓超論中国學術思想變遷之大勢」、『飲氷室合集・文集』之七、中華書局、北京：中華書局、1989年影印版、pp1、21。

3) 費孝通「中華民族多元一體格局」、費孝通等著『中華民族多元一體格局』、中央民族学院出版社、1989年、p1。

4) 羅志田「夷夏之弁的開放与封閉」、『民族主義与近代中国思想』台北：東大圖書公司、1998年、pp35-60。

5) 梁啓超「東籍月旦」、『飲氷室合集・文集』之四、中華書局、北京：中華書局、1989年影印版、pp94、96。

梁啓超は『中国史叙論』の中で初めて「中国民族」という概念を提起し、また中国民族の歴史を三つの時代に分けた<sup>6)</sup>。同年、彼は『国家思想変遷異同論』の文章で初めて「民族主義」と「民族帝国主義」という二つの概念を紹介した<sup>7)</sup>。彼は「民族主義は、世界において最も公明、正大、公平な主義だ」、なぜなら「他民族に己が自由を侵させず、己も他の族の自由を侵さない。自国においては、人の独立、世界においては、国の独立を認める」からであると主張している。梁啓超が民族主義を強く提唱した原因はここにある。彼は国民に対して、すみやかに民族主義を涵養し、欧米の民族帝国主義に抵抗すること要求し、「他人が帝国主義によって侵略してくることを恐ろしさを知り、すみやかに我が固有の民族主義を涵養してそれに抵抗することが、いま我が国民のやるべきことだ」としている<sup>8)</sup>。梁啓超は民族国家 (nation-state) を構築することが中国を救う唯一の方法と考え、「民族主義者はまさに、近代国家を創る原動力だ」と提起している<sup>9)</sup>。民族国家により国を救うという思想は中国の知識界に広く受け入れられ、民族主義思潮が中国において盛んになった。

その後、20世紀の初頭から、「国家」や「民族」などの言葉が広く使われるようになった。当時の思想、文化、政治の分野領域で活躍した代表的な人物である章太炎、孫中山、汪兆銘などは皆「民族」という言葉を使い、論説したことがある<sup>10)</sup>。梁啓超と違って、これらの思想家は中国国内の民族問題にも大きな関心を持っていた。彼らの目標は梁啓超と同じく、やはり現代国家 (nation-state) の構築にあった。中国近代の民族主義思想家が、国民理論の思想の枠組みの中において「民族」を認識したことからわかるように、中国語の「民族」という言葉は近代に「同文」の国の日本から借りたものである<sup>11)</sup>。しかし、中国の近・現代史で非凡な意味を持つ「民族」の概念は、日本から来たものを誤って解釈した。日本で最も有名な辞書である「広辞苑」の「民族」の定義は次のとおりである。「文化や出自を共有することからくる親近感を核にして歴史的に形成された、共通の帰属意識を持つ人々の集団」。文化面では特に共同の言語を使うことを強調しており、時には宗教や生計の形態も民族的な伝統となりうる。族とは社会生活の基本的な構成単位で、必ずしも同じ地域内に居住するものではなく、ある社会ではいくつかの民族から構成され、人種や国民の範疇でぴったり合うとも限らない。この日本の国粹主義運動や国体論を背景に生

6) 梁啓超「中国史叙論」、『飲氷室合集・文集』之六、中華書局、北京：中華書局、1989年影印版、pp11、12。

7) 梁啓超「国家思想変遷異同論」、『飲氷室合集・文集』之六、中華書局、北京：中華書局、1989年影印版、pp19-22。

8) 梁啓超「論民族競争之大勢」、『飲氷室合集・文集』之十、中華書局、北京：中華書局、1989年影印版、p35。

9) 梁啓超「論民族競争之大勢」、『飲氷室合集・文集』之十、中華書局、北京：中華書局、1989年影印版、p11。

10) 周伝斌『中国民族理論新範示的探索』、中央民族大学2005年博士論文、p11。

11) 王柯、「民族：一个来自于日本的誤解」、『二十一世紀』、2003年6月号、第七十七期、pp73-83。

まれた日本製の漢語の「民族」でまず最初に気づかされるのは、それが血縁の基盤の上に築かれた文化共同体の概念である点だ。これは島国である日本の高度に同質的な社会・文化の伝統には合うが、しかし中国の伝統的な「天下観」、「華夷観」及び広範な辺境地域に多元的な文化が存在する中国には対応できないものである。中国の民族主義者は省みなければならぬだろう。孫中山を代表とする革命党人が、満州族を排斥するという手段によって、民族国家の創設を目的としたことに始まり、「五族共和」の中華民国を創るまでが、民族主義発展の一つの転換期であったのである。中華民国の成立後、民族主義は勢い思潮になり、徐々に一種のイデオロギーに変化して解釈されるようになった。9・18（満州事変）から抗日戦争の全面的な勃発にいたるまでに、民族主義は抗日や救国の旗印になり、中国人の民族意識はかつてなく高潮した。しかし「一つの国家、一つの民族、一人の指導者」というスローガンは存在したものの、国内外の困難な状況の中で、蒋介石を代表とする民族主義者は一貫して理想的な現代的な民族国家を創設することができなかった。逆に列強諸国、特に日本帝国主義は、中国辺境の民族問題を絶えず利用して、統一体としての中国の瓦解を試みたのである。

いずれにせよ、20世紀の前半には、現代的な民族国家の構築による救国の試みが中国の先進的な有識者の共通認識になった。新興の現代的な民族国家（nation-state）構築の努力に対応して行われたのが、学界における西洋の社会科学の模倣開始であり、学科構築が実践された。人類学について言えば、その中国における創立はある程度は当時の統治集団の政治的な必要性からの産物だといえることができる。統一かつ現代的な一つの民族国家を創るには、「中華」民族の世界における位置づけを説明しなければならず、また、中国国内の諸民族の状況を理解して「五族共和」のための実証的な根拠を確立する必要がある。人類学のフィールドワークの方法や社会文化の研究方法は、こうした業務を完了するための有力なツールとなった。このため中国の人類学・民族学の創成期の研究実践は国家主義の濃厚な色彩を帯びると同時に、「中華民族」の構築により民族国家を打ち立てるといふ意識の下で、中国の人類学・民族学の開拓者は彼らの研究成果を用いて中国の現代的な民族国家構築のために十分な理論的根拠を提供したといえるのである。

1900年代から1927年頃まで、中国の知識階級は新しい知識と中国の伝統文化における人類発展に関する解釈、中国古代の文献資料とを組み合わせ、民族、種族などの現代民族学概念について基本的な理解を進めた<sup>12)</sup>。同時に、中国の学者の一部は現地調査の試みを始め、関連の著作も生み出した。これらの著作はまだ十分ではなく、非専門的な民族誌であるにもかかわらず、既にそれまでの「華夷大防」の概念を超え、もはや辺境の少数民族を夷蛮と見なすことから脱し、国民の一部分と見なしている<sup>13)</sup>。1927年以降、民族

12) 王建民『中国民族学史（上巻）』、雲南教育出版社1997年、p97。

13) 胡鴻保主編『中国人類学史』、中国人民大学出版社2006年、p40。

学・人類学学科の創立と学術研究体系の規範化によって、中国大陸部の民族学・人類学は大きな発展の時期を迎えた。中国の民族学・人類学には華東地区、華南地区、北方地区の三つの主な研究地域が生まれ、また中国機能学派、中国文化学派、中国歴史学派の三つの大きな理論流派が生まれた。異なる学術傾向を持つ人類学者たちが積極的にフィールドに出て、人類学の研究や実践を通じて中国の現実を説明しようと考え、それぞれの理論体系を構築すると同時に、現代的な民族国家の理論構築の中に自覚的あるいは無自覚的に参与していったのである<sup>14)</sup>。

呉文藻は中国社会学、人類学、民族学の開拓者である。彼は若い頃に、米国に留学し、1929年に帰国した後は中国の学界に欧米社会の思想と人類学の各流派を幅広く紹介した。中でも特に英国の機能主義と米国のシカゴ学派のコミュニティ研究 (Community Studies) の方法を中心に紹介した。呉文藻は社会科学研究の中国化を模索、追及し、人類学の実際の応用に打ち込んだ。彼の影響の下で、最終的には人類学の中国機能学派が形成された。1926年の米国留学中に呉文藻は、『民族と国家』という論文を発表し、中国において現代的な民族国家を創る意義を提起した<sup>15)</sup>。同文において、呉文藻は、人類学の基本概念によって中国で流行していた民族主義思潮を分析し、中国において「一つの民族、一つの国家」を構築するという理論には欠陥があると指摘し、多民族の統一国家を創ることを主張した<sup>16)</sup>。彼は「一つの民族は一つの国家を創ることができるが、必ずしも一つの民族でなければ一つの国家を創るべきではないというものではない。幾つかの民族が自由に連合して一つの統一の多民族国家を創ることは、その文明生活の密度や協力精神の強さにおいて単一民族国家に負けず、勝るに違いなく、多民族国家内の団体生活の豊かさは単一民族国家内の団体生活に勝るに違いない」と説いた<sup>17)</sup>。呉文藻の民族研究は費孝通や林耀華、黄華節、李有義、陳永齡などの民族学・人類学の大家に重要な影響を与えた。そのうち費孝通の『中華民族多元一体格局』は『民族と国家』で、詳しく述べられた民族理論を継承、発揮したものだと考えられている<sup>17)</sup>。多民族で一つの国家を創るという民族理論に基づく国家の領土的危機に対して、呉文藻は1942年『辺政公論』で『辺政学発凡』を発表し、辺境政治学研究の枠組みの雛形を確立した。呉文藻は同文において「辺政学は辺境民族の政治思想や事実、制度及び行政の科学についての研究」であると指摘し<sup>18)</sup>、人類学の民族研究を地方と民族に対する国家の行政の実践に直接応用した。呉文藻を代表とする一部の民族学や人類学の学者は、中華民族内部の民族関係を整理し、統一の民族国家構築のため

14) 王建民『中国民族学史 (上巻)』、雲南教育出版社1997年、pp123-160、胡鴻保主編『中国人類学史』、中国人民大学出版社2006年、pp68-76。

15) 呉文藻『民族と国家』、『呉文藻人類学社会研究文集』民族出版社1990年、pp19-36。

16) 呉文藻『民族と国家』、『呉文藻人類学社会研究文集』民族出版社1990年、pp19-36。

17) 費孝通「中華民族多元一体格局」

18) 呉文藻「辺政学発凡」『辺政公論』1942年第1巻第5-6期

の根拠を提供することに打ち込んだ。しかし、一部の民族学、人類学の学者は民族国家構築の討論に直接は関与しなかった。彼らの研究の趣旨は「科学主義」の方法によって民族文化を客観的に描写することであり、中国の伝統的史料の掘り起こしを重要視し、社会・文化事項の総合的分析を強調した。こうした研究の傾向は中国人類学研究の歴史学派と呼ばれ、凌純声がその代表的人物である。彼は1926年、仏・パリ大学に留学し、人類学者モース (Marcel Mauss) などに師事した。1929年に博士号を獲得した後に帰国した彼は、仏民族学派の理論方法を中国に紹介した。『松江下流のホジェン族』は凌純声による中国の現代人類学の先駆的かつ重要な作品であり、中国人類学、民族学の研究史上で初めての科学民族誌の功績として認められ、中国においては長い間、民族学調査のモデルであった<sup>19)</sup>。全部で上下二冊と図版一冊からなり、図版は本文に関連する文化事項の描写や撮影である。本文はホジェン族の歴史と現実の社会的、文化的生活を描いたほかに、ホジェン族の言語と物語について整理している。こうした文化の箇条書き的な叙述はその科学民族誌の実証論及び経験論の立場を十分裏付けるもので、資料収集と精確な叙述を重視する中国人類学研究の歴史派の研究の筋道を集中的に表している。しかし「客観的記録」という自己標榜の背後には、逆に著者によるある種の理論の事前設定が含まれている。『松江下流のホジェン族』で凌純声は、中国領内の各地のエスニック・グループの古文書などを網羅する、北方民族の淵源について考証し、あらゆる地区の宗教や文化、生活に関係する資料を利用してホジェン族の宗教と比較した。こうした論証方式は、一つのエスニック・グループの文化が「同質」であると事前に設定しており、またその前提は中国の古典書籍に書かれた領域の区分のもとで作られたため、すべての民族またはエスニック・グループは同様な、中華民族の民族構築のレベルにおいて考察されている。これらのことから、凌純声は直接は中国の「民族とは何か」を限定していないにもかかわらず、中国伝統の華夷の分類思想を現代人類学の思想と融合し、自分の研究において「中華民族」の統一性を前提としていることが分かる。

凌純声の研究は、中国の史学派の伝統と西洋の民族・人類学理論の方法を総合して研究する歴史学派の傾向が現れており、民族誌の記述表現によって中華民族の統一性への理解を表現した。中国の史学研究の伝統と民族学・人類学の理論方法との結合のもう一つの側面は、中国の民族の通史を記述することにある。中国民族通史の研究者たちは西欧の民族理論を借用し、中国の膨大な史料を探求して、歴史の記述の中で人類の歴史に「中華民族」が占める地位を確立した。人類学者の李濟の『中国の民族の形成』(1923)は初めて中国の民族通史を記述したのである<sup>20)</sup>。その後の民族史研究の専門書として、張其昀『中国民族志』(上海商務印書館、1933年)、王桐齡『中国民族史』(北平文化学社、1928年、1934

19) 凌純声『松花江下流のホジェン族』民族出版社、2012年版。

20) 李濟、『中国民族学的形成』江蘇教育出版社、2005年版。

年出版訂正増補本)、常乃勉の『中国民族小史』(愛文書局、1934年)、曹松葉『中華人民史』(商務印書館、1933年)、呂思勉『中国民族史』(上海世界書局、1934年)、『中国民族演進史』(上海亜細亞書局、1935年)、宋文炳『中国民族史』(中華書局、1935年)、柳貽徵『中国民族史』(上海世界書局、1935年)、林惠祥『中国民族史』(上海商務印書局、1936年)、郭維屏『中華民族發展史』(成都、1936年)、李広平『中華民族發展史』(正義出版社、1941年)、張旭光『中華民族發展史綱』(桂林文化供給社、1942年)、俞劍華『中華民族史』(国民出版社、1944年)、呂振羽『中国民族簡史』(光華出版社、1948年)など十数冊がある。これらの作品の中には中国の各民族内部の特質についてに研究したものや、民族関係を整理したものもあるが、いずれも全て「中国」領域内に歴史的に存在した各民族を中華民族の一員と見なしており、一つの多民族国家としての中国の統一性を強調している。

20世紀前半、中国の民族学者、人類学者はフィールドワークに打ち込み、歴史の史料を探し求めて、人類学の枠組みの中で国家と民族、中華民族全体と各民族共同体の関係を詳しく説明し、中国における「単一民族建国論」の苦境を解決するために努力した。民族学者・人類学者の論説は「中華民族」の共同認識形成、「統一的な多民族国家」の国家観確立に、思想と学術面から支持を提供し、民族国家構築の過程において重要な貢献を行った。中国の民族学・人類学の民族研究はその始まりから国家や政治と絡んできたのであり、現実の政治を離れて学術の問題を考えることはできない。当然、この時期の学者は比較的自由的な学術研究の環境を持っており、一般的な討論はいずれも規範的な学レベルで展開され、学術活動自体は独立性を保っていた。

### 3. 中国五十六民族の実体の確立——政治概念としての民族を論ずる

中華人民共和国の憲法は、「中華人民共和国は全国の各民族人民が共同に創った統一的な多民族国家である。平等、団結、互いに助け合うという社会主義民族関係がすでに確立し、また今後も引き続き強化される。」「中華人民共和国の各民族はすべて平等である」、「国家は各少数民族の合法的な権利と利益を保障し、各民族の平等、団結、互いに助け合う関係を維持、発展する」と明確に指摘している。

憲法の中にある「民族」には非常に明確な意味がある。小・中学校の啓蒙教育を通じて教えられるように、中華人民共和国は多民族国家であり、56民族があり、この五十六民族の総称が「中華民族」であり、中華人民共和国の下に統一される。そのうち漢民族が中国人口の中で一番多く、地域的分布が最も広い民族であり、ほかの55の民族は総称して「少数民族」と呼ばれる。大多数の中華人民共和国の公民はこの56民族にはっきりと区分されている。民族の帰属は姓名、性別、年齢の他に最も基本的な個人情報である。

しかし、56民族の実体確認は複雑な歴史のプロセスを経てきた。中華人民共和国は、

共産党が指導する、マルクス主義を指導理念とする国である。マルクスは民族を人類社会の特定の歴史発展段階における産物に過ぎないと見なし、無産階級に対する資産階級の圧力が登場した後は、統一的な民族の利益が階級の利益にその地位を譲ると考えた。階級対立において、最も基本的な圧力の形式である階級の圧力を除去することさえできれば、その他の形式の圧力（民族の圧力を含む）はそれにともない解決し、その際には民族は国家と同様に、存在の必要性を失って自然に消滅すると考えたのである。中国共産党は成立の当初、マルクスの民族についての論述を完全に受け入れ、中国領域内のそれぞれの特徴を備える族体を全て「民族」とした<sup>21)</sup>。コミンテルンとソビエトの影響下で、中国共産党は中国各民族の「自治」を支持し、独立の国家を創らせた。しかし、帝国主義の侵略が進むにともない、中国共産党は「民族独立」の危険性を認識し、民族平等を強調すると同時に、抗日の背景の下で、さらに各民族の団結を強調した。1938年、中国共産党中央委員会は西北工作委員会を設立した。その委員が陝甘寧辺境と内蒙古の西部地区で調査を行って『回回民族問題提綱』と『蒙古民族問題提綱』を書き、マルクス主義の観点から中国の民族問題を分析して、平等、団結、互いに助け合うという民族政策を提起した。1947年、中国共産党の指導の下で内蒙古自治区が成立し、民族の自己管理を保障すると同時に国家の統一も保障し、中国共産党が民族問題を解決する上での模範とモデルになった。

1949年に中華人民共和国が成立された時、中国共産党はすでに『中国人民政治協商会議共同綱領』第六章「民族政策」<sup>22)</sup>という国内の民族問題を解決する一連の系統的な政策を作った。その内容は上述した最新の修正された『中国人民共和国憲法』の民族政策と比べても、根本的な変化はなかった。民族政策を実行するため、1950年6月、毛沢東の提言に基づき、中央人民政府政務院は中央民族訪問団を派遣し、少数民族地域を訪問することを決めた。1950年7月から1952年末にかけて中央は合計四つの民族訪問団を派遣した。メンバーには高級官僚もいれば、費孝通を代表とする人類学者、民族学者もいた。中央民族訪問団派遣の主な目的は、新中国の民族平等・団結政策をアピールし、新政権の成立を示すことにあった。同時に、民族地域の基本状況を把握するため、中央民族訪問団のメンバーの一部、特に人類学者と民族学者たちは民族地域においてフィールドワークも行い、大量の一次資料を収集し、後の民族識別業務の基礎を築いた。民族識別とは、「自分自身がある民族」に属すると主張するグループに対して行い、それは独立の民族なのか、それともいずれかの民族の一部に属するのかを調べた。一つの中国という国家において、民族地域の自治政策を実現させるためである<sup>23)</sup>。中華人民共和国が実施する民族地域自治政策

21) 何翠萍「從中国少数民族研究的几个個案談「己」与「異己」的關係」、徐正光・黄心貴主編『人類学在台湾的發展——回顧与展望編』、「中央」研究院民族学研究所、1999年、pp366-368

22) 『中国人民政治協商会議共同綱領第六章』を参照。『民族政策文献匯編』、人民出版社、1953年、p1。

23) 中華人民共和国は民族地方自治政策を実施する。各少数民族が集住する地方には、自治権があり、自

は、各少数民族が集中して住む地方において地域自治を実施し、自治機関を設定し、自治権を与えるというものである。しかし新中国設立当初は、中国にはどれぐらいの「少数民族」があるのか、誰にもわからなかった。民族成分と民族名称の混乱した状況を改善するために、1950年から中央及び地方の民族事務機関が科学研究チームを組織し、全国から報告された400あまりの民族名称の識別を開始した。民族識別業務において、まず解決しなければならないのは、民族共同体の境界をどのように区切るかということである。ソ連に全面的に学んでいた建国初期の背景下で、新中国中央政府の組織した民族識別業務は、スターリンの民族定義を採用した。「民族とは歴史上形成された同じ言語、同じ地域、同じ経済生活、同じ民族文化の特徴を基に見られる同じ心理的素質、という4つの基本的特徴を持つ人々の安定的な共同体である」<sup>24)</sup>。この定義は客観的な基準を持ち、操作しやすい。しかし、民族は「普通の歴史的範囲ではなく、一定の時代、即ち資本主義の上昇する時代の歴史的範囲のものである」<sup>25)</sup>。中国大陸・民族識別業務の過程では、具体的な事情と結び付けて柔軟的に対応しなければならなかった。また各民族に対する尊敬を際立たせるために、新中国政府は、各グループが自ら自分の民族識別を決める、即ち「本人の自称を尊重する」ことを強調した。つまり民族識別業務は、民族の客観的な特徴を基準にするだけでなく、民族内部の主観的意識をも考慮する必要があったため、民族識別業務はさらに複雑さを増した。

中国の民族識別業務は三段階に分かれる。第一段階は1950年から1954年までの民族識別の端緒の段階で、38の少数民族を認定し、そのうち27は新しく認定されたものである。第二段階は1954年から1964年までの民族識別のピーク段階で、15の少数民族を認定した。第三段階は1965年から1978年までの民族識別業務が干渉を受けた時期であり、1つの少数民族を認定した。第四段階は1978年から1990年までの民族識別の回復段階であり、1つの少数民族を認定し、また民族成分の回復と改正に関する業務が幅広く行われた。1990年の全国第4回人口センサスにより、中国には56の少数民族があると正式に認定された<sup>26)</sup>。民族識別業務の過程で、人類学・民族学の理論は民族確認において重要で、また決定的ともいえる役割を果たした。民族識別業務に参加した黄淑婷は「問題の焦点は、『共通の文化』という特徴のみを持つ人々の共同体を、一つの民族として認定するか否かという点にあった。もし事前の理論設立に従い一つ一つ照らし合わせたなら、否定するしかない。そうすると中国の多くの民族は単一民族とはいえないことになる。民族学理論による族体の存在状況についての研究分析によると、民族の特性を構成するのは、同じ言

治機関も建てられている。

24) スターリン、『スターリン全集』、第11巻、人民出版社、1956年、p286。

25) 同上。

26) 宋蜀華、満都爾図主編、『中国民族学五十年』、人民出版社、2004年、pp68-73。

語、同じ文化的特性（広い意味でいえば言語も文化の一部分である）の二要素である。一つの民族を他の民族から区別する最も本質的な特徴は、文化である。私たちは当時スターリンの『同じ文化に見られる同じ心理的素質』という民族についての論述を十分考慮し、民族を規定する理論を参考とした。民族を構成する最も重要な特性である、同じ文化的特徴を有することを民族識別の基準と決め、実証に基づいて物事の真理を追求するという精神を堅持した。そのため、四つの特性を同時に備えていないグループも民族として認定された。長い間私たちはこのようなやり方を『柔軟に活用する』と謙虚に述べてきたが、今日から見れば、まさに、民族識別の前提理論を突破する重要な実践であった」とまとめている<sup>27)</sup>。費孝通の「穿青人」に対する識別と潘光旦のトゥチャ（土家）族に対する確認は、人類学者の民族識別参加の典型的な例である。

費孝通は1930年代にすでに民族地域のフィールドワークを行っており、彼の民族的理論は主に呉文藻とセルゲイ・シロコゴロフ（中国語名：史録国、Sergei Mikhailovich Shirokogorov, С. М. Широкогорова）の影響を受けたものであった。新中国成立後、費孝通は中央政府が派遣した西南訪問団と中南訪問団に参加し、分団長として貴州や広西の民族地域を訪れ、政治的任務を成し遂げると同時に大量の資料を集めた。これらの資料は後の民族識別業務で重要な役割を果たした。費孝通は民族識別を二段階に分けた。まず「識別するグループは漢族の一部か、少数民族か」、そして「少数民族なら、単一民族か、それともある民族の一部か」を明らかにするのである<sup>28)</sup>。民族識別において費孝通は、マルクス・レーニン主義と中国の実際とを結び付けて考えることを強調し、特に「民族と言う人間の共同体は歴史の産物である」<sup>29)</sup>と指摘した。このような理論の下で費孝通は貴州省の北西部の穿青人を漢族と認定した。費孝通は1950年に中央訪問団を率いて貴州を訪れた際に、自分たちを一つの民族と申請した30あまりの民族があり、うち10あまりは言語や生活方式が周りの漢族とほとんど同じだが、少数民族の待遇を要求しているということに気づいた。そのうち、もっとも人口が多いのは「穿青人」で約20万人の人口を持ち、言語や地域、経済生活、心理的素質などの面でいずれも漢族とは違う特徴を持つ単一民族だと自認していた。「穿青人」が漢族なのか少数民族なのかを確認するために、1955年に費孝通は「穿青人」について実地調査を行った。費孝通はまず歴史考証を行い、「穿青人」は明朝の時代に貴州に移住した漢族の末裔であることを確認した。これらの漢族移民は漢文化の中心地域から隔たった中国の片隅に住んではいたが、軍隊と密接な関係を持つことから、漢族の文化的特性と言語を維持していた。続いて、費孝通はフィールドワーク資料

27) 黄淑娉、「民族識別及びその理論意義」、『中国社会科学』、1989年第1期、pp107-116。

28) 費孝通、『わが国の民族の識別問題に関しては』、『費孝通文集（第七巻）』、群言出版社、1999年p199。

29) 同上、pp202-203。

の分析を通して穿青人と周辺の漢族との関係を分析し、穿青人と周辺漢族との差異は漢族内部の地方的差異であることを確認した。穿青人が自分たちを少数民族と考えるのは、後に定住してきた漢族の差別によるもので、また「こうした差異や矛盾は、漢族が現代的な民族に発展する過程において徐々に、消えつつある」<sup>30)</sup>とし、最終的に穿青人を漢族の一部だと認定した。

費孝通の穿青人に対する認定は、民族認定における漢族と少数民族の識別区別の典型的な例である。これに対して、潘光旦のトゥチャ（土家）族に対する確認は、単一少数民族認定の典型的な例である。潘光旦は国学の豊富な知識を持ち、西洋の社会科学の系統的な訓練も受け、中国の經典によって社会科学理論を解釈することを得意とし、民族問題にも独特な見解を持っていた。民族識別の業務においては中国と西洋を貫く研究スタイルを十分に発揮し、『湘西北のトゥチャと古代の巴人』<sup>31)</sup>で、少数民族としてのトゥチャ族の地位を確立した。トゥチャ族はずっと湘西に居住し、「トゥチャ」とは外界に対して用いられる自称である。1950年代まではまだどの民族に属するか、確定されておらず、漢族の一部だと認識されることもあった。トゥチャの人たちの民族を認定するために、潘光旦は古書を博覧し、また湘西トゥチャ族集居地を訪れて調査を行った上で、『湘西北のトゥチャと古代の巴人』の「前書き」によって、「トゥチャ」は現在、その大部分が湖南省北西の竜山、永順、保靖などの県に住んでいる非漢族の民衆である<sup>32)</sup>、トゥチャは古代巴人の末裔であると明言した。「前論」において潘光旦は資料の分析を通して、「トゥチャ」は瑶族、苗族、獠族とも異なるとして、周辺少数民族との関係を明らかにした。「正論」は全部で十節ある。最初の四節は歴史分析で、潘光旦は古代正史や地方誌、筆記など大量の古書を考証した上で、「巴人とトゥチャとは経済、社会、文化生活の面でいくらかの同じ特性を持ち、これらの特性は巴人とトゥチャのみに特有なもので、他のグループには見られない」<sup>33)</sup>という結論を得た。続く五節、潘光旦は文献とフィールド調査資料を合わせ、一歩進んで巴人と「トゥチャ」の緊密な関係を論証した。「論拠一自称」という節で、潘光旦は、巴人と「トゥチャ」は同じ自称を持つことを論証した。論拠二、論拠三においては、虎を手がかりにして、巴人と「トゥチャ」が同じ社会生活と文化的特徴を持つことを発見した。潘光旦は言語学によって巴人と「トゥチャ」の関係を分析し、巴人がトゥチャに変わったことを証明した。費孝通と潘光旦の研究のケースにより人類学者や民族学者たちは民族識別業務の実践を通じて、教条的にスターリンの民族定義に基づいて民族群体の境界

30) 同上、pp202-203。

31) 潘光旦、『湘西北のトゥチャと古代の巴人』、潘乃谷、潘乃和選編、『潘光旦選集（第二集）』、pp309-480。

32) 同上、p311。

33) 同上、p358。

を区切るのではなく、それぞれの学術的特徴を生かして最終的な判断を下したことがわかる。しかし学者の意見が政府文書や法律の形式により国家的意思に格上げされると、認定された民族が確定された人々の集団となった。民族地方自治と各民族政策の実行にともない、認定された民族の内部構造と民族間の関係に根本的な変化が生じ、各少数民族はまず地方自治を通じて政治的実体になり、その後は統一的な国家の枠組みの下に各自の文化的特性を構築して、明確な民族となっていく。1987年までに、民族識別業務と民族成分変更の業務はおおむね終わった<sup>34)</sup>ものの「しかし、まだ問題は残っており、きちんと解決しなければならない。人数は少ないが状況は複雑で、難易度も大きい」<sup>35)</sup>とされている。1990年の第4回人口センサスによると、中国大陸部にはまだ「その他の識別されていない民族」が749,341人もいた<sup>36)</sup>という。しかし、全国的に見れば、中国大陸部では56の民族の構成が最終的に確立された。

#### 4. 民族、エスニック・グループの「名実の論争」

##### ——学問的概念としてのエスニック・グループを検討する

民族識別の過程は、ソ連の民族学のモデルが中国大陸部で地位を確立していく過程でもあり、この過程は1950年代の中国大陸部の社会変革の一部でもあった。新中国ではマルクス・レーニン主義が社会の各分野で指導的な地位を持ち、知識界がまずその改造の対象となった。「学院・学部調整」や「知識分子の思想改造運動」、「資本主義社会科学への批判運動」を通じて、20世紀前半に中国大陸部において確立された学問システムは徹底的に潰され、その代わりにソ連モデルの大学教育体制と社会科学システムとなった。人類学や民族学についていえば、人類学学科は取り消され、人類学者や民族学者は新たな業務に移動させられ、1930年代や、同40年代に形成された人類学、民族学研究の地域的特性やさまざまな学派は完全に消えた。それと同時に、ソ連の民族学に関連する理論と学術著作が系統的に中国に紹介された。こうした背景の下で、大部分の人類学・民族学の学者は新たな業務を受け入れ、また民族訪問団や民族調査の業務に熱心に取り組み、明確な態度で思想改造を受け入れた。費孝通が『私のこの一年』で述べたように「思想を立て直した」のである<sup>37)</sup>。また林耀華を代表とする一部の学者はさらに「一步先を行き」、ソ連の民族学理論を紹介・解釈して、ソ連式の民族学の専門研究機関の構築に参加し、ソ連の民族学

34) 黄光学、「民族識別和更改民族成分工作已基本完成—国家民委副主任黄光学答記者問」、『中国民族』、1987年第2期、pp16-17。

35) 同上。

36) 『中華人民共和國國家統計局關於一九九〇年人口調查主要數摺的公報（第三号）』、1990.11.14。中華人民共和國國家統計局ネット：<http://www.stats.gov.cn/tjgb/rkpcgb/index.htm>

37) 費孝通、「我這一年」、『費孝通文集（第六卷）』、群言出版社、1999年、第109頁。

モデルに基づいて若い学者を育成して、民族識別業務をマルクス主義の民族政策理論やソ連の民族学体系と結びつけて中国の各地に普及させたのである。

ソ連の民族学モデルが中国大陸部で確立された当初から、民族の「名と実」についての論争が存在し、しかし、これらの論争は、新中国におけるマルクス・レーニン主義の主流なイデオロギーの枠組に限定されていた。1954年の『民族問題叢書』においては「民族学」は「人種学」とも訳されている<sup>38)</sup>。中国とソ連の学問的交流の深化にともない、ソ連の民族学の著作が数多く中国語に訳され、両国の学者の相互交流が実現した。ソ連の民族学は、「歴史科学の一部を構成し、その任務は直接的観察、科学的記述と歴史学的分析方法によって、人種的、民族的特性の上から世界における様々な族の変遷・発展の特性を研究することであった。各族の起源の問題を解決し、その移動と分布の歴史を跡づけること」<sup>39)</sup>と定義されていた。その後の中国とソ連の関係悪化で、ソ連の人類学は中国大陸部で批判されたにもかかわらず、この定義は引き続き中国の民族学研究に深い影響を与えた。民族識別業務において中国の民族学者は、民族は歴史的概念であると強調し、スターリンの民族定義と中国の民族の現状とのギャップを埋めていった。民族識別以後、「民族」は中国大陸部における政治身分の概念となり、各民族自体が民族学の明確な研究対象になり、民族学は民族政策のために仕える「社会科学研究」となした。こうした特徴は『少数民族社会歴史調査』に如実に現れている。林耀華は『少数民族社会歴史調査』の経緯と性質を次のように学術的に回顧している。「1956年、全国科学研究12年計画（草案）が制定された後、全国人民代表大会の民族委員会の指導下で、少数民族歴史調査団が組織され、かつてない大規模な社会歴史調査研究業務が開始された」、「各少数民族社会歴史調査団は積極的に業務にとり組み、1959年から続々と少数民族簡史、簡誌、自治地方概況の三シリーズの叢書の原稿を完成した」、「これらの原稿と調査資料は、中国共産党の民族業務及び、民族地域での社会改革と建設方案の制定のための根拠と参考になった」<sup>40)</sup>。少数民族社会歴史調査は中央政府が直接組織し、その調査結果は国家のために提供された。1960年代初頭、『辞海』の編集中に直面した問題を解決するために、「民族歴史研究業務指導委員会の下で一連の重要な学術的意義を持つ討論会と座談会が開催された。『民族学』、『民族』、『部族』などの言葉の意味と内容、一部の少数民族の起源と形成の問題、歴史上の民族関係の問題、少数民族における歴史的人物に対する評価の問題などを討論した」<sup>41)</sup>。その中で林耀華は、「民族」と「部族」はいずれも歴史的にも現実的にも存在する民衆の共同体を指すと考え、

38) 王建民、張海洋、胡鴻保、『中国民族学史（下巻）』、雲南教育出版社、1998、p95。

39) Сергей Павлович Толстов、『ソ連民族学の任務』、中央民族学院編集部、『民族問題叢書——民族学専刊』、民族出版社、1956.6。

40) 林耀華、「新中国の民族学研究と展望」、『民族研究』、1982年第2期、pp48-55

41) 林耀華、「新中国の民族学研究と展望」、『民族研究』、1982年第2期、pp48-55。

「民族学の対象は明らかである。つまり、各時代の民族共同体を研究することである。民族学の他には民族を専門の研究対象とする学科はない。こうした点から民族学は特別な特質を持つ学科である」<sup>42)</sup>と述べた。この論点は広く認められた。しかし中国大陸部における1960年代、同70年代の政治的環境の下で、民族学という学科は否定され、民族研究や民族問題研究という言い方が民族学に取って代わったのである<sup>43)</sup>。

中国大陸部の民族研究は実際のところ、1950年代の中頃から後半にかけて世界の人類学や民族学の研究とは完全に分離したのである。ほぼ同じ時期に西洋の社会学、民族学、人類学はエスニック・グループの理論を徐々に発展させていた。1920年代、同30年代から、外国の学者たちは早くも中国の民族問題に強い興味を示していた。中国の民族問題に対する彼らの注目の動機はそれぞれ異なり、ほとんどが民族国家建設という理念は持っていなかったが、彼らの研究は、中国の人類学学科に大きな影響を与え、中でも特にロシアの人類学者、セルゲイ・シロコゴロフの研究成果は重要であった。シロコゴロフは1910年代にロシア・極東地区と中国が接する地域の「ツングース人」を対象に、人類学調査を行い、1930年代に中国で、『北方ツングースの社会組織』<sup>44)</sup>という本を英文で出版した。同書の中で、シロコゴロフは「北方ツングース人」を「民族単位」と把握した。「民族単位」とは、その単位の中では、民族誌の要素が変貌、次代へ伝達されるプロセス及び生物学的要素が伝達されるプロセスが進行中である。これらの単位は永遠に変動（変遷）の過程にあるため、昨日の単位は明日のそれとは全く異なるが、発生学的に見れば、同じである」<sup>45)</sup>としている。この定義においては「民族誌的要素」に対する理解が最も重要である。「これらの要素が、民衆の持続的な共同体の社会機能を規定し、これらの要素により形成されるその複合体がある種の内部的なバランス関係を備え、民族単位の繁栄を確保し、また一定の経済制度や物質文化、精神的・心理的活動を維持する。つまり、民族単位の存在と継続を確保する」<sup>46)</sup>とシロコゴロフは考えた。費孝通は『人不知而不愠一史禄国先生を追想する』<sup>47)</sup>においてシロコゴロフの「民族単位」を解説し、シロコゴロフが「民族 (nation)」と混同しないように、ラテン語「ethnos」で「民族単位」を指したと指摘した。Ethnosは政治や「国家」と関係なく、同じアイデンティティーを持つ人のグループである。

エスニック・グループ (ethnic group) の概念はマックス・ヴェーバーに遡ると一部の学

42) 林耀華、「民族学研究対象と民族社会性質に関する研究」、『雲南社会科学』、1981年第3期、pp51-61

43) 王建民、张海洋、胡鸿保、『中国民族学史（下巻）』、云南教育出版社、1998年、第95頁。

44) 史禄国著、吳有国、趙復興、孟克訳、『北方ツングースの社会組織』、内蒙古人民出版社、1985年。

45) 同上、p11。

46) 同上、p9。

47) 費孝通、「人不知而不愠一史禄国先生を追想する」、『費孝通全集（第十三巻）』、群言出版社、1999、pp75-91。

者は指摘する<sup>48)</sup>。しかし西洋では1960年代まで、系統的なエスニック・グループ研究はなかった。初めは、米国の少数民族末裔の問題討論に始まり、その後の研究の中で「エスニック・グループ」の概念が開拓され、それに基づいて世界中に広く存在する民族問題が検討されることとなった。人類学界でもエスニック・グループを中心概念とする理論モデルが徐々に形成され、中国の少数民族が数多くの人類学者の注目する対象となっていった。米国の学者グラッドに—(Druc C. Gladney)の回族に対する研究および王明珂のチャン族に対する研究が最も影響力を持つものとして挙げられる。『中国のムスリム』<sup>49)</sup>で、その中心的な内容は四つの回族コミュニティの民族誌描写にあり、中国大陸部における「回族」のエスニック・アイデンティティの検討を趣旨とする。北西地域の回族農村の民族誌描写でグラッドに—は、宗教の復興が地元の回族ムスリムのアイデンティティ形成に果たした役割を強調した。また、北京の牛町では、地元の回族住民がイスラムの飲食文化をアイデンティティのシンボルとすることを発見した。エスニック・グループの理論を中国大陸部の民族政策というコンテキストの中において、国家の言説と自己認定がいかんして五十六民族の一員としての「回族」を共同で構築したのかを解き明かしたところに貢献がある。王明珂の代表作は『羌在漢藏之間』<sup>50)</sup>、『華夏辺縁——歴史的記憶とエスニック・グループ認識』<sup>51)</sup>、『兄弟伝説と祖先崇拜』<sup>52)</sup>などがあるが、これらの著作においては「文献資料は『テキスト』(text) または『叙述』(narratives) であり、その背後にあるコンテキスト(context) と個人的感情が強調されている」<sup>53)</sup>。王明珂は歴史記憶の研究を行い、「歴史記憶の研究は、すでにある歴史の知識を再建するのではなく、新たな態度、即ち歴史資料を社会記憶の遺品とする態度で歴史資料を認識することである。その上で資料分析において、『歴史的事実』に対する理解を再度構築する。そうして得られた歴史的事実は、歴史資料に記載された表面的な人物や事件だけに留まらない。史料テキストの選択、描写と構築の中から、その背後に隠れている社会と個人のコンテキスト、特に当時の社会のアイデンティティと区分の体系を探ることが一層重要である」<sup>54)</sup>とした。このような理論的観点の下で行われた王明珂のチャン族研究は強力な「脱構築」力があると考えられた。しかし王明珂自身は「現在の中華民族を近代的な建物と見なすにしても、五千年余りの輝かしい歴史を持つ民族と認識するにしても、いずれも民族の本質とその形成の歴史をあまりに

48) 葉江、「当代西方「エスニック・グループ」理論探析」、『華東師範大学学報(哲学社会科学版)』第37巻第5期、2005年9月、pp82-88。

49) Druc C. Gladney, *Muslim Chinese: Ethnic Nationalism in the People's Republic*, Harvard University Asia Center 1991, 1996.

50) 王明珂、『羌在漢藏之間——川西羌族の歴史人類学研究』、中華書局、2008.5。

51) 王明珂、『華夏辺縁——歴史的記憶とエスニック・グループ認識』、中国社会科学文献出版社、2006.4。

52) 王明珂、『英雄祖先と兄弟民族』、台北允晨文化出版公司、2006。

53) 王明珂、「歴史事実、歴史記憶、歴史心性」、『歴史研究』、2001年第5期、pp136-147。

54) 同上。

も簡単に捉えすぎである」<sup>55)</sup>と考えた。中国の民族学・人類学の復興と再建の中で、グラントに―と王明珂の研究も広く紹介されて、様々な論争が引き起こされた。その研究の観点や理論追及は中国の民族学、人類学に確かに積極的な影響を与えた。

1980年代から、中国大陸部の人類学・民族学の建て直しが始まり、学問研究が復活して、西洋人類学の各流派の思想が流入した。エスニック・グループは最も早く導入された西洋人類学概念の一つとして、間もなく「少数民族」と言う概念と混同され、論争になった。1950年代以降、中国大陸部の民族学は「少数民族」を研究対象とする歴史学科となり、民族学のみが「民族」を研究対象として、独立の学部としていた。民族への理解が実質的に民族学の性質を決定しており、学科再建においてまず論じられる問題となった。様々な議論の中で西洋のエスニック・グループの理論が系統的に中国大陸部の民族学、人類学界に紹介され、学者たちも概念の討論の中で中国の民族学を振り返り反省することとなった。また民族学や人類学が中国大陸部で再建された後には、学者たちが新しい問題と方法を模索し、新たな理論を構築しようとする訴えも見られた。同時に、一部の学者は概念の討論に拘らず、エスニック・グループ理論の観点の下にフィールドワークを展開して、民族誌の編纂に努めた。中でも黄淑娉をリーダーとする嶺南地区のエスニック・グループの研究が代表的である。黄淑娉は米国嶺南基金会の出資援助を得て「広東エスニック・グループと地域文化」の課題研究を実施した。1994年-1999年にかけて人類学の教師（院生も含まれる）を中心とするチームを組織し、広東の17県(市)で実地調査を行い、多分野(形質人類学、文化人類学、言語学、考古学、歴史学、心理学、経済学、社会学など)にわたる総合的研究を行い<sup>56)</sup>、『広東エスニック・グループと地域文化研究』<sup>57)</sup>、『広東エスニック・グループと地域文化研究調査報告集』<sup>58)</sup>を出版した。この総合的な研究プロジェクトにおいては関連する理論の整理も行われているが、中国社会に対する実証研究、特に広東漢民族の「民系」研究において開拓的意義がある。

1990年代末、中国の「国家民族事務委員会」は英文名を従来の「The State Nationality Affair Commission」から「The State Ethnic Affair Commission」に変えた。中国の学界におけるエスニック・グループの概念についての議論はますます活発化している。中国の現行の民族政策を問題に、また他方では、エスニック・グループに関する実証研究も広く行われ、多くの調査報告や民族誌が著わされ、大量の資料が蓄積された。学術的概念としてのエスニック・グループは極めて大きな柔軟性を持ち、曖昧といっても言いすぎではないほ

55) 王明珂、『反思性研究与当代中国民族認同』、『南京大学学報(哲学、人文科学、社会科学)』、2008年第1期、pp55-67。

56) 中山大学人類学科サイト <http://home.sysu.edu.cn/human/jgry/Untitled-20.htm>

57) 黄淑娉主編、『広東エスニックグループと地域文化研究』、広東高等教育出版社、1999.6。

58) 黄淑娉主編、『広東エスニックグループと地域文化研究調査報告集』、広東高等教育出版社、1999.6。

どであったが、まさに「曖昧なエスニック・グループ」の研究こそが中国の民族学・人類学の発展を後押ししたといえる。

## 5. 「实在論」と「構築論」を超える「多元一体」

民族とエスニック・グループの「名実の論争」は実際のところ、社会科学の「实在論」と「構築論」の二元対立を表している。費孝通が1988年に発表した『中華民族多元一体格局』は、これではなければあれであるというような論述モデルを超えたものとなった。費孝通の「多元一体論」は、呉文藻とシロコゴロフの民族研究の継承であり、長年民族研究に従事してきた費孝通の体得した深まっていく認識である。費孝通は1950年代の民族識別業務を振り返って「民族と言うこの人々の共同体は歴史の産物である。安定性もあるが、歴史の過程の中で絶えず変化している。各民族は互いに融合したり分化したりする。だからこそ、民族の名簿は永遠的に固定するものではなく、民族識別業務も今後も継続されるだろう」<sup>59)</sup>と回顧している。1980年代初期には、また「民族回廊」説を提唱し、歴史や地域全体として捉え、ひたすら単一民族を研究するという中国の民族研究の伝統に対して大きな啓発的意義をもたらした。中国の民族識別の業務が終わり、中国の56の民族という構造が形成された。費孝通は「中華民族多元一体構造」という文章で自分の民族学思想を系統的にまとめている。「根本的な概念に対する冗長な説明を避けるため、中華民族という語を、現在中国の領域内で民族的アイデンティティを持つ11億の人民を指す概念とする。その構成員である五十あまりの民族は多元的ではあるが、中華民族というカテゴリーの下で一体を成している。いずれも『民族』ではあるが、両者は次元の異なるものである。国家と民族とは互いに異なり、また互いに関連する概念であるため、国家の領土をもって中華民族の範囲とするのはあまり適切ではない。このように区分するのは、便宜上の理由と、政治的論争を避けることができるためである。また、マクロな観点から見れば、国家と民族の範囲は基本的または概ね一致しているといえるだろう」<sup>60)</sup>と文章を始めた上で、「国家民族」や民族共同体などの基本的な概念を定義してから主題に入り、5000年にわたる歴史と10万里に及ぶ地域の資料を利用して、「各民族が互いに浸透しながら、それぞれの個性を持つ多元的統一体」<sup>61)</sup>の形成を論証して、統一的な中華民族は歴史発展の必然であることを説明しただけでなく、中華民族共同体に対する人々の意識の重要性をも強調した。『中華民族の多元一体構造』で述べられた思想は、実証研究のレベルでも大きな反響を

59) 費孝通、『わが国の民族の識別問題』、『費孝通文集（第七巻）』、群言出版社、1999年 pp202-203。

60) 費孝通、『中華民族多元一体格局』、費孝通等、『中華民族多元一体格局』、中央民族学院出版社、1989、p1。

61) 同上。

呼んだ。ここでは二つの例を取り上げる。一つは蔵彝回廊の「白馬人」、一つは南嶺回廊の「陽春排瑶」である。「白馬人」は四川省西部に居住し、国からは蔵（チベット）族と認定されているが、彼らの言語や習慣、信仰はいずれも青藏高原の蔵族とは大きな違いがあり、彼ら自身は自分たちを独立したエスニック・グループだと見なしている。もっとも国家の認定と自分たちの文化的アイデンティティーとの乖離は、白馬人たちの実際の生活に問題をもたらしてはいない。逆に白馬人は国家によって与えられた身分を柔軟に運用して、自分たちと漢族や他の少数民族との関係を適切に処理しており、また自分たちの文化的な独立も維持している。「陽春排瑶」は広東省北部の山岳地に住む、人数は多くないエスニック・グループで、1980年代まではずっと漢族と見なされており、生活習慣は周辺の漢族と大きな違いはなく、また周辺の漢族グループと長期にわたり通婚関係にある。後に地方幹部と民間の文化エリートの努力の下で民族成分を変更して瑶族となった後、陽春排瑶はすぐに自分たちの生活方式を変え、グループの歴史記憶を再構築して、自分たちと周辺の漢族との区別を明確にした。白馬人と陽春排瑶のケースは中国の民族身分の認識の多様性を表すもので、また民間社会と国家とが力を合わせて文化システムの多元性を保障するだけでなく、中華民族が一つの方向へ統一されるよう導かれるものであることを物語っている。

民族にしろエスニック・グループにしろ、いずれも人類社会に対する人類学の最も根本的な問題を含んでいる。人類はまず生物的な属性を備えており、血縁によりグループを形成し、家族を構築して「自らと他者」を区別し、最終的には親族制度を通じて結びつき一つの共同体を形成する。ここから人類学の社会組織研究が形成される。人類にはまた文化的属性もあり、言語や習慣、信仰が認識を形成してグループを構築し、エスニック・グループに拡大する。ここから人類学の文化的事項研究が始まる。血縁を絆とする共同体は実体であるが、文化により結成されるエスニック・グループは構造という特徴を備えていることから、「実体論」と「構築論」の議論が生じた。しかし人類の歴史が民族国家建設の段階に入ると、民族の実体と虚像との二元的対立は打ち破られ、人々は文化や社会、国家を描写する知識体系について再度調整を行い、歴史がもたらす現実の問題に対応しなければならなくなっている。これこそまさに、人類学を含む現在の全ての人文・社会科学の最終的な関心事なのである。